福祉用具専門相談員 研究大会 初開催 成功裡に

「第1回福祉用具専門相談員研究大会」が6月17日、都内で開催された。全国福祉用具専門相談員協会と日本福祉用具供給協会の共催。およそ350人の参加者が全国から集い、会場は熱気に包まれた。

「手すりに色付け」など現場の好事例を共有

大会長の全国福祉用具専門相談員協会・岩元文雄理事長は、開会のあいさつで「福祉用具専門相談員が日頃、現場で培った力を存分に発揮し、大会テーマである『福祉用具のちから』を発信してほしい」と呼びかけた。福祉用具専門相談員による発表は口述発表とポスター発表をあわせて全22演題。現場での日々の実践を通し、さまざまな好事例や取り組みが披露された。

パナソニックエイジフリーの白木一寛さんは、認知症利用者への支援事例を発表。介助者の息子と二人暮らしのAさん（92歳女性）は大腿部骨折から最重度の要介護5の判定を受けた。在宅生活の中で、最も負担だったのがトイレ動作。立ち上がりや脱衣の動作を安定させ、息子さんの介助負担を軽減するためにトイレ内と入口に手すりを設置した。しかし、息子さんが「手すりにつかまって」と声掛けをしても、Aさんにうまく伝わらない。息子さんが無理に手すりをつかませようとすると「なぜ引っ張るの」と口論になったり、間に合わず失禁したりすることもあり、かえって双方の負担が増えてしまったという。その後、Aさんはアルツハイマー型認知症を発症していたことがわかった。

白木さんが、「どうすればAさんに手すりを認知してもらえるか」と悩んでいたところ、自社の介護施設で認知症の人が認知しやすい色について調査していたことを思い出した。その調査では、赤と黄緑が比較的認知しやすい色という結果だった。そこで、白木さんは手すりに赤と黄緑のテープを張り、息子さんに「赤を握って」「次は緑ね」などと簡単な声掛けをしてもらうことで、それまで3分かかっていたトイレの出入りが35秒まで短縮された。負担が軽減された息子さんからも「これからも母と一緒に暮らし続けていけそうだ」と喜ばれたという。

トップコーポレーションの入江和幸さんからは、状態変化などタイミングを見極めた提案で利用者のADL向上や生活範囲の拡大に繋げた事例が発表された。80代男性のBさんは骨髄炎で右ひざを曲げられず、さらに脊柱管狭窄症の後遺症も合わさって当初は歩行が困難だった。手術を繰り返し、脊柱管狭窄症による症状が緩和されたタイミングで馬蹄型歩行器の導入を提案。訪問リハビリのセラピストと連携し、自宅で歩行訓練を行った。屋内移動が安定したころに、入江さんは「次は屋外に出てみませんか」と提案。Bさんの頑張りにより、屋外用歩行器で250mの距離を歩けるようになった。

できることが増えると、Bさんの意欲も高まり、趣味の絵画教室に歩いて通いたいという次の目標ができたという。ただ、絵画教室は500m以上離れているうえ、坂道もあったため、入江さんは「絵画教室へ歩いて行く」と目標を2段階に分けることを提案。まずは電動カートを利用することで、絵画教室に行けるように支援した。

念願の絵画教室に行けるようになったことをBさんは喜びながらも、やはり歩いて通いたいという気持ちは持ち続け、今も意欲的に訓練に取り組んでいるという。入江さんは状況の変化に注意しながら、「適切なタイミングで歩行器から多点杖への切り替えも提案したい」と話した。

「どうすれば伝わるか。常に意識を」

口述発表の座長を務めた元厚生労働省福祉用具・住宅改修指導官の小林毅氏は、日々の支援で「『取り組みがどうしたら聞き手に伝わるか』を常に意識してほしい。例えば、数値を使うことも一つの手法だろう」と総括した。

次回は来年6月16日に、日本教育会館（東京都千代田区）で開催される。

現場の好事例などの発表で参加者は学びを深めた

シルバー産業新聞　2019年（令和元年）　7月10日号　15面